西川さんに学んだこと

●追悼分科会

高知・大黒美和

７月２日に西川浩司さんが急逝され84歳の生涯を閉じられました。わたしが先生になったばかりの時に，「西川さんを学ぶ会」があり，たくさんの人たちがその会を通して西川さんの実践に学んできました。あれから 30 年近くの時間が経って，自分たちが西川さんに学んだことは何だったのかを確かめ，ふり返ることを通して，西川さんに学んだことを伝えていきたいと思いました。そして，西川さんに感謝の気持ちを込めて追悼の分科会をやりたいと思いました。参加者は約40 人。出されたレポートは13 本でした。

最初に仮説実験授業 50 年史編纂室の重弘忠晴さんの「西川浩司さん」のレポートの発表があり，西川さんの生い立ちから小学校の教師となり，仮説実験授業に関わり始めた頃のこと，組織者としての西川さんの功績について話してくれました。

仮説実験授業が提唱された 1963 年当時は，その研究に参加したのはみんな私立の小学校の先生ばかりでしたが，やがて，仮説実験授業が『理科教室』や成城での公開授業研究会で知られるようになると，公立の小中学校からも熱心な実践者，研究者が現れ始め，西川さんはその初期の頃から公立の小学校で仮説実験授業を実践した教師のひとりでした。西川さんは 1967 年に第一回合宿研究大会（有馬大会）の実行委員長を務め，「兵庫仮説実験授業研究会」を組織し，1983 年には「第一回西日本たのしい授業ゼミナール」を組織し，その後「尼

崎・たのしい授業フェスティバル」へ発展させました。そればかりでなく，自主的なサークルを作り，仮説実験授業の研究と普及につとめた初めての人でもありました。仮説実験授業のサークルはその後全国に作られるようになりましたが，西川さんの始めた尼崎サークルはその先駆的存在でした。

その一方では自ら授業を公開して，その具体的な授業運営法は若い教師たちの指針となり，1987 年には犬塚さんを中心に「西川さんを学ぶ会」が結成され，「会報」や「西川さんの授業シリーズ」としてガリ本やその実践が発表されてきました。

また，西川さんは仮説実験授業の熱心な実践者であったばかりでなく，仮説実験授業によって自らが教師として変革されたことを強烈に自覚した人でもありました。西川さんに「子ども中心主義」は仮説実験授業によって自らを変革することによって身につけたものです。（「仮説実験授業でめぐりあった人びと①　重弘忠晴さんの資料より」）

このあと，レポートを書いて来てくれた人の発表や，西川さんについて井上勝さんが話をしてくれました。犬塚さんは西川さんの「若き教師たちへ」の講演と「再び西川さんのこと」というレポートと『新版　授業のねうちは子どもがきめる　…たのしい教師は自然発生しない…』（西川浩司講演集　仮説社　2001 年）の本に西川さんと板倉さんの写真と井上勝さんの言葉を入れた帯を新しく作り，それを追悼本として大会のガリ本ダービーに持ってきていました。

> ボクは西川さんとは歳が近くて，（犬塚さん 73 歳，西川さん 84 歳）仮説に入ったのが数年しか違わないんだけど，なにしろボクの「師匠」と勝手に言ってきました。重弘さんの資料の中で＜西川さんの恐さ＞というのが二つあると言っていました。「普段は温厚な西川さんが怒りを出して主張することがある。ひとつは仮説実験授

業をやっているが，あるいはやろうとしているが，自分の主体的な判断で実践しているわけでない教師に対して厳しい。もうひとつは子ども中心主義に反することをした時に厳しい。その二つだ」と書いていました。ボクはあまり西川さんに学んでないんですが，やっぱりそういうことはぼくも西川さんに学んでいるというのか，そうやってボクも教師をしていたいと思って生きてきました。

今回，大会に西川さんの追悼本としてこの『新版　授業のねうちは子どもがきめる　…たのしい教師は自然発生しない…』（西川浩司講演集　仮説社　2001 年）を持ってきました。帯に井上勝君の言葉も入っています。この中に入っている西川さんの講演でもうひとつ好きなのが「教室の主権者は子どもたちです」という講演です。

「仮説実験授業をする時には，＜自分が本当にやりたい＞という欲望が高まってからやってください。人がやって，カッコよさそうだからやるというのではなく，少々困難があってもやるというくらいの欲望が高まるのをじっくり待ってほしいのです」で始まり，「仮説実験授業は子どもがすべてを決め，それに従うのが先生です。＜教室の主権者は子どもである＞という極めて民主的な状況の中で授業をすすめられるのは，仮説実験授業しかありません。だから，仮説実験授業をうまくいって，はじめてみなさんは＜民主的な教師＞になることができるのです」という言葉で締めくくっている講演です。

西川さんは板倉さんと似ている所があって，ボクが小学校に行った時に「小学生は，感想一枚に楽しかったとしか書かない。授業書はクシャクシャにするし，あんなのはしょうがない」と西川さんに言ったら，「あんた，仮説が分かってないね」と叱られた感じはないんだけどそう言われました。板倉さんにそういう子どもの悪口のようなことを言ったら板倉さんも怒ると思うし，若い先生の悪口を言ったら怒ると思います。そういう点では西川さんは板倉さんとと

ても似ています。そして，板倉さんが無茶苦茶に本を買うのと似ていて，西川さんは板倉さんの監修した岩波映画の 16 ミリフイルムを授業で使うなら全部自分で買っているんです。差はあるにしても西川さんと板倉さんの生き方は似ている。だから，板倉さんもきっとそういう西川さんに「安心している」と言ったんだと思います。

25 周年の時に板倉さんが「1000 人の会をやる」と言って，今も毎年，春にフェスティバルをやっている尼崎の会場の中小企業センターと福祉センターを借り切ってやることになりました。会場費が 200 万かかる。西川さんが「犬塚さん，100 万ずつ出そうね」とボクは「分かった」と（笑)。西川さんはいつもボクを後押ししてくれたし，ボクを自由にさせてくれました。そういう意味では恩人だし，西川さんにとってもそうところがあると思います。ボクは西川さんに学んだというよりも，西川さんに学んだ人たちにとても支えられている部分が大きいですね。その人たちが広めて伝えてくれています。

西川さんが入院して，お見舞いに行った時に，西川さんの 80 歳のお祝いの時に板倉さんが書いてくれたお祝いのメッセージのコピーを持って行って，それを二人で読んだんです。「若い時から全世界でもっとも早くから仮説実験授業一筋に実施されてきた西川さんの功績は素晴らしいものがあります」と，こういうのを読んで「西川さん，幸せだねえ」と言いながら二人で笑ってたんです。そういう感じでした。それからちょっとして亡くなったんです。西川さんは亡くなりました。ぼくたちは楽しく生きるしかないですね。楽しく生きていきましょう。

西川さんが遺してくれた，教えてくれたたくさんのこと。授業書に感動しながら，子どもの気持ちをどこまでも守り育てながら授業すること。西川さん，楽しく授業していきます。楽しく生きていいきます。